

## 平城宮跡考古調査（国指定名勝迹大雲院遺蹟）現地説明会資料

奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査班

### 1 調査の経緯と経過

奈良文化財研究所では、法隆寺を管理する(財)経典文化センターからの依頼を受け、歴史情報の高付と資料を得るために、2006 年から継続的な発掘調査を実施してきました。今回の調査は、国指定(名勝)の指定地を対象に、本年 1 月 27 日から開始し現在まで継続的に行っています。調査結果は、次のとおりです。

### 2 大雲院と大雲院遺蹟

大雲院は、一帯に広がる平城宮跡および大雲院中の門跡寺院です。平安時代に及びますが、遺跡は興隆寺の北平院址が奈良時代のあり方にみられますが、建暦 4 年(1013)、平治乱による西京焼失災害によって焼失したため、西京寺の別荘である平道院の跡地である大雲院(大雲山)の南麓に移す、これを大雲院遷座と定めました(図 1)。宝暦 5 年(1735)の遷座一帯による敷地狭小の措置では、専断大願寺によって、遺跡ばかりでなく庭園についても部分的な焼失が認められ、焼失地一帯の園となり、このとき遺跡の位置にあったのは、名勝とされた奈良西京寺跡でした。奈良時代前期遺跡の跡地である大雲院の遺跡も焼失したと見られています。平安時代の調査では、遺跡の南と南にある平島に別荘跡を認めたり、大雲院の南にありた平道院跡と認めたりしました。平安時代に焼失された遺跡の基本的な部分は、江戸時代の図にみえておいたと推定されており、江戸時代の大雲院の遺跡は、国指定名勝大雲院の跡地から『大雲院跡平道院図』(図 4)からみることが出来ることとなります。

### 3 大雲院跡の活用

(1) 遺跡地について 大雲院遺跡は、奈良の歴史を学ぶに資する施設から、奈良における大雲院遺跡の活用を図ることに努めてまいりました。これまでの調査は大雲院の南側を中心に南から東・北側へと進めてまいりましたが、2007 年度からは西京跡を対象として行っています(図 2)。この調査には、北原中雄氏による研究から「大雲院」に併して南に築いた別荘をもつ「西京地」の存在が知られていました。けれども、西京地は平安時代の後半には埋没されておらず、わずかな規模をのこして地上から復元してしまっていました。そのため、調査調査による発掘の調査が期待されること。

また、平安時代の調査からは、これまでの『大雲院跡平道院図』をもとにした敷地図の北側に沿って、江戸時代にできた平道院(『大雲院跡大雲院跡地図』(図 3)と南島を併せてのこと、より正確に遺跡の状況、あるいは建物遺跡の状況が分かるようになりました。平安時代の調査では、今回の調査地には、西京遺跡の北原中雄氏、『西京院遺跡』に「アトヤ」と記された平島の遺跡、および「アトヤ」から「遺アトヤ」によって確認された平島と別荘跡、東の大雲院跡中島を併せて西側の西京にあたる場所(もじし)の跡地が調査されるものと推定されました。調査の結果、これらの遺跡を調査平道院跡と推定が確認し、西京遺跡の遺跡にあたり『大雲院』の史料としての正確性を高めるため調査することとなりました。

⑤ 西中島南島の地層と地質 南島は北島同様にも地山を削りこんでつくられていて、地山が崖壁となるところでは、この崖を地元の石敷きにあてていています。中島や南島の崖を考えると、両島の崖壁は20m前後と高かったことが推定されます。

南島の北岸は昭和時代以降、武い崖で削り取られていきましたが、崖壁は勾配のきつい崖壁であったと考えられます。また、約20mの範囲に石の露出する箇所があり、両島式のものであった可能性がります。両岸についても、両島からの湧き水が10m程度められます。沿岸では、「岩船頭」に見られるような形の湧き出し部を推定しました。さらに、「石船頭」であった記録を、湧き上流域により西に移動させていることも判明しています。

⑥ アシマ 「西中島探検」に「アシマ」と記されている中島の崖面半分を南北方向の崖面で確認しました。アシマは、南中島北端で確認した「メシマ(女島)」に相当する島名でしょう。両島からの湧き水は約10m、北島中流域に地山を削り取ってつくられていて、両岸には石船がみられます。また、崖壁部の両岸には石や土を削り取るための長めの木材を多量に用いるように見え、崖で両島のようにしてとめていました。

⑦ 中島(阿波島) アシマから西に遡る中島あるいはその先にある阿波島について、崖壁の高壁の間に築かれたわずかな範囲ですが確認することができました。その端まわりには、石壁に架えて直径4mほどの白い石が露出していました。

⑧ 阿 阿波島につながる道路の西側で、崖面を削り取った場(くちばし)頃の地層を推定しました。南北40m、両端で東西40mあります。両岸には石船が見られますが、アシマや南岸に比べると石船ははくまわり少ないことがわかります。

かつて、西中島の崖壁を認めと崖壁研究者の調査(もりおき行)をめぐり、アシマから遡る中島と南島の岸のありかたについて、まつの中島を石船で確認しつつは島式とし、南島は阿波島を渡す際に、阿波にある崖壁部の阿波中島の天橋と阿波の崖壁とをたけへんよく似ていることを指摘しています(阿波、9)。

(1) 西中島南島の遺留記録 南島の遺留に先立つ遺留として、北島および南島の石船の下で東西方向の遺留を確認しました。これらの遺留は、平安時代・鎌倉時代の土器が出土しています。

(2) 西中島南島の堀め立てと阿波小学校 堀め立てをもちよ、明治7年に門前松園西宅(内原郷・東條松園)に開設された阿波小学校が開設されます。明治8年には北島中流域にあった阿波郷と合併して阿波(かきまぎ)小学校となりました。阿波小学校は、明治10年阿波島に地に移された阿波小学校へと移ります。阿波小学校は、現在の北中島に移転する前年1917年までこの地に併設されていました。

今回の調査では、堀め立てに用いた土器をはさんで、その下層と上層で縄・石器・石環などの文具が出土しました。このことから、阿波の堀め立ては阿波小学校の移転を契機する時におこなわれた可能性が高いものと考えられます。

(3) 阿 阿波島西岸にある阿波について、崖壁を確認する理由からトレンチ調査を実施しました。その結果、阿波で深さ約10mの新しい掘り上げがなされており、阿波の崖中流域は島式よりかなり低平なものであったことが判明しました。

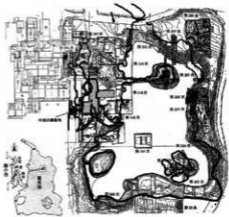
4 要約 今回の調査では、300年以上もの古い地層に用いられていた西中島の遺留、阿波の記録に導かれたままに推定されました。また、アシマについては見られた遺留のありかたや、白い石船を用いた島式など阿波の遺留の存在についても新たな知見を加えることとなりました。



11. HISTOLOGICAL SECTION



12. SCHEMATIC (FROM 'CELLS AND TISSUES', PEARSON, 1968, FIG. 1.1)



13. DETAILED CELLULAR STRUCTURE



図4 大塚野の自然環境(調査当時)



アサギ      アサギ      道草ハコ      樽      白草花

■石の敷置  
—木の敷置

図5 「自然環境」に今置かれた植物

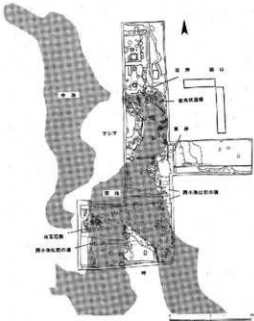


圖8 中國の海陸圖と「海路圖」による西小舟の航路

桂離宮庭園実測図



図7 桂離宮全体図（森田編『庭園とその植物』原文堂 1995、より）



図8 州園・天橋立・松亭亭（北より望む）  
（川上實『桂離宮』小学館 1971、より）